

発達障害早期発見スクリーニング法の検討：五歳児健診での適用による実証研究

大阪芸術大学 初等芸術教育学科 教授 田中裕美子

はじめに

発達障害等の早期発見・支援の重要性が言われながらも、発達障害が疑われる児童を発見する取組みが十分に行われていないことが行政評価・監視により判明した。特に、就学時期に適切なスクリーニングが行われておらず、学習につまずいたり、不登校やいじめにつながったりしていることが少なくないため、早期発見のための実践可能な方法やシステムの構築が急務である。

そこで、広島県江田島市の協力を得て、年5回実施されている5歳児健診の際に、就学後、授業についていくために必要な学習言語の習得度を評価する学習言語(読み・ナラティブ)スクリーニングテスト(H24, 29年度塚本学院教育研究費助成により作成)を一次健診として実施し、より精度の高い5歳児健診スクリーニングシステムの構築する予定であった。しかし、平成30年7月に起こった西日本豪雨災害により江田島市が甚大な被害を被り、研究の実施が困難になった。そのため、今回、幼稚園や小学校ではスクリーニングとしての効果を、発達支援センターや病院などでは、相談・指導事例の評価や指導への適用方法などを検討した。

方法

1) 実施対象：大阪市・栃木県那須塩原市幼稚園年長児59名(男28名、女31名)、堺市内小学校学童保育の1年32名(男22名、女11名)、東京都内クリニック受診の学童3事例(小2男児)、秋田市子ども発達支援センターに受診の年長女児1名、東京都内病院受診の人工内耳装着(CI)2事例(幼児男児、小4男児)

2) 実施内容：①スクリーニングテスト(ナラティブ再生・新奇文字のdecoding規則を用いたダイナミックアセスメント)②標準化検査の下位検査項目3種(表出語彙、理解語彙、絵の概念)

3) 実施方法：幼稚園や小学校学童保育では本研究スタッフ、クリニックや病院では言語聴覚士が対象児に個別に30～40分間実施した。

結果

1) 通常級におけるリスク児のプロフィール

幼稚園児(59名)中6名、小1児童(32名)中3名に学習言語の習得に躓きリスクがあると判定された。特に、小1児童の中のリスク児の反応を検討すると、ナラティブ再生課題で実施時間が20分以上かかったにもかかわらず、習得できないなど「学習言語習得にリスクがある子どものプロフィール」が明らかになった。さらに、渡日年齢や滞日期間が同じ外国籍(中国)の年長児2名の成績や反応を検討すると、両者とも日本の定型発達児より習得度が低いものの、2名で習得率パタンなどに顕著な違いが認められた。

2) 子ども発達支援センターを受診の年中女児

出産時に仮死状態となり、画像診断では左脳に損傷が認められ、「名前が覚えられない」、「理解が悪く、姉が本児に話をしなくなった」などの家族からの報告があるものの、保育や療育現場では本児に言語の問題

があるとは認識されていなかった。事前評価では、ストーリーの最後部のみ再生であったが、絵やアイコンを用いた指導を通して3/4を再生できるようになり、応用では60%達成率であった。このことからナラティブを用いた言語(語彙や文法)の明示的(explicit)指導に効果が期待できることが示唆された。

2) 言語に問題がある小2児童の結果

幼児期から療育を受け小学校では通常学級に通うA児(ADHD)とB児(ASD)は特別支援教育(通級)を受けており、C児(診断無)への支援は担任による配慮のみである。3名ともストーリーに必要な要素を組み入れ、内容は伝えることができるようになっていったが、複雑な文構造はみられず、実施時間が15～20分かかった。また、言いよどみや文法のエラー等の言語の問題、離席のような気になる行動もみられた。A児は、視点を変換させた上での表現がみられた。B児は、アイコンが手がかりとなり、話題を維持できた。C児は、画面上に現れた第三者を視界から外すと内容を伝えることができた。

3) CI児の場合幼児と学童

5歳CI児は、事前評価ではほぼ語ることができず、声も小さかった。指導の中で声量も増え、事後評価では55.6%と伸びたが、応用では要素をほぼ語れず13.6%だった。このようにCI年長児もこの課題で習得の可能性を見ることができると考えた。また、この事例では応用が難しかったが、実は、この事例は小さい頃から初めてやることに関して抵抗が強く、その時の状態や気分で成績が大きく異なるため、一般的な反応としては解釈できないとも示唆された。

10歳CI児は事前評価で77.8%と得点率も既に高く、課題実施でポイントを理解し、自ら発話を改善して、事後評価では83.3%、応用では100%と小3の成績に遜色なかった。

考察

今回の調査で本スクリーニングテストが年長児より小1児童における学習言語の習得における躓きリスクの有無の判別力が高く、支援の必要性も導きやすいことが分かった。また、外国籍の幼児に習得の問題が認められる場合、その背景にDifference(言語環境による違い)かDisorder(言語発達障害があるのか)かのいずれかを示す可能性が示唆された。

すでに診断されている子どもへの実施を通して、どこで何が難しいのかという躓きの様相も明らかになった。また、語想起や理解の弱さなどの問題はあっても、お話という文脈の中で、焦点化されたアイコンや文字などの視覚的な手掛かりを用いた言語指導によって言語が伸びる可能性、人への「伝え方」を学習できる可能性、聞き手を具体的に意識させることの意義など支援の手がかりになる情報も得られることが分かった。